



世界文学全集 46

サルトル

水いらず 汚れた手他

アラゴン

パリの神話 殉難者の肖像

河出書房

世界文学全集 46 サルトル
アラゴン



© 1969

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和37年12月15日 初版発行
昭和44年8月1日 11版発行

定価 430円

訳	者	伊白佐	吹井藤	武浩	彦司朔
発	行	中	島	隆	之
印	刷	草	刈	龍	平
装	幀	原			弘
印	製	刷・中央精版印刷株式会社 本・中央精版印刷株式会社			

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の六

電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目 次

サルトル

水いらず 一

汚れた手 三七

部 屋 一五七

アラゴン

パリの神話 一八七

殉難者の肖像 三五五

年 譜 四一九

解 説 四三三
白井浩司
佐藤 朔

水
い
ら
ず

伊サ
吹ル
武ト
彦ル
訳

一

リュリュが真つ裸で寝るのは、シーツにからだをすりつけるのが好きなのと、洗濯賃が高つくからだだった。真つ裸でベッドへはいるやつがあるか。そんなことするもんじゃない。きたないと、はじめのうちアンリーは抗議したが、しまいには女房を見ならうようになってしまった。けれど彼の場合それはずばらだった。人前では氣取って棒みたいに堅くなるくせに（彼はスイス人、とりわけジュネーヴの人に感心していた。堂々としている」というのだが、それはスイス人がしゃちこぼっているからだだった）、こまかいことにはものぐさだった。たとえばあまり身奇麗ではなく、ズボン下も度々は替ええない。リュリュはズボン下を洗濯物入れに投げ込むとき、股のところがこすれて黄いろくなっているのを見ないわけにはいかなかった。自分のこととなると、リュリュはきたないのがいやではなかった。きたないほうがしっく

りする。よごれはしんみりした影をつくるものだ。たとえば肱のくぼみのところなど。リュリュはイギリス人があまり好きではない。無感覚な個性のないあのからだ。しかし亭主のずばらは、そういう仕方でわが身を甘やかすのだから堪らなかった。

朝、起きあがると、いつも寝ぼけ顔でわが身をいたわるのだ。日の光も冷たい水もブラシの毛も、まるで非道な責め苦のように感じるのだ。

リュリュは仰向きに寝て、左足の親指をシーツの裂けめに突っ込んでいた。いや、裂けめではなくて、綻びだった。これはうるさい。あしたになったら縫わなくちゃ。でも、リュリュはちよつと糸を引っ張って、糸の切れるのを感じるのだった。アンリーはまだ眠ってはいない。が、もういつこう邪魔にはならない。アンリーはしじゅうリュリュにいったものだ。おれは目を閉じたが最後、細い丈夫な皆さんの糸で縛られたような気持ちになる。もう小指すら上げられない。蜘蛛の巣に絡み取られた蠅なんだ。リュリュは捕われたこの大きなからだを、身近く感じるのが好きだった。もしこの人このまま中風にでもなってしまったら、わたしが看病してあげよう。そしてまたこの人のおかあさんが見舞いに來たら、なんとかいって蒲団をひんむいてやろう。蒲団をはねたらお

かあさんはこの人の真っ裸のところを見るだろう。おかあさんは腰を抜かすにきまっている。この人のそういうところを見るのは十五年ぶりなんだから。リュリユは夫の腰のあたりを軽く撫で、腿の付け根をちょっと捻った。アンリーは唸ったが、ビリッともしない。不能になってしまったのだ。リュリユは微笑した。「不能」という言葉を聞くと、いつも笑えてくる。まだアンリーが好きだったころ、そしてアンリーがこのとおり麻痺状態になって、リュリユのそばに寝ているとき、リュリユは子供の時分、ガリヴァーの話を読んで、そのおり挿し画で見たのと同じような小びとたちの手にかかって、夫が根気よく、がんじがらめに縛りあげられたのだと空想しては楽しむのだった。リュリユはアンリーをよく「ガリヴァー」と呼んだ。これはイギリス名前だし、そういうとリュリユが物知りらしく聞こえるのでアンリーはたいそう悦に入ったが、できることなら本場のアクセントで発音してもらいたかった。ああ、みんなのうるさかったこと。もし教育のある女がよかったら、ジャーヌ・ブデルと結婚すりゃよかったんだ。あの女は乳こそ狩の角笛みたいに垂れ下がっているが、でも五カ国語に通じている。日曜日ごとにソーへ出かけて行ったころ、わたしはこの人の家であんまり退屈なもんだから、手あたり

しだいに本を取り上げた。すると、きつとだれかがわたしの読んでものを覗きに来た。この人の妹などは、「わかるの、リュシーちゃん」なんてきいたっけ。つまりこの人はわたしを下品だと思っているのね。そりゃそうよ、スイスの人は上品だわ、だって、あの人の姉さんはスイス人と結婚して五人も子供をこしらえたんだもの。そして二人して、山の話であの人を煙に巻くんたもの。わたしなんか子供は出来っこない。こればかりは動かない。でも、あの人がわたしといっしょにそとへ出たとき、しょっちゅう共同便所へ行くなんて、あの人のすること、ちっとも上品だとは思えない。わたしはあの人を待ちながらショーウィンドーを覗いていなけりゃならないんだ。淫売じゃあるまいし。それからこの人はズボンを引っ張りながら出て来るんだ。よぼよぼ爺さんみたいに股をひろげて。

リュリユはシャツのやぶれめから親指を出し、両足をピクピク動かしした。ぐったり動かないこの肉体のそばに、発刺とした自分を感じるのが楽しいので。グルグルという音がした。おながが鳴っているのだ。これはたまらぬ。この人のおなかかそれともわたしのか、さっぱりわからない。彼女は目を閉じた。これは柔かい管の塊のなかを液体がグルグル流れているのだ。管の塊、それは

だれにでもみんなある。リレットだって、わたしだって（そんなこと考えるのはいや、おなかが変になる）。この人はわたしを愛しているけれど、わたしの腸を愛してはいない。もしわたしの盲腸を壘に入れてこの人に見せたら、まるで見当もつかないだろう。この人は、しょっちゅうわたしのからだをいじるけれど、もしその壘を手にしたせたら、気持ちのなかになんにも感じはしないだろう。「これは女房のものだ」とは思わないだろう。好きならその人のなからなまでに好きになるのがほんとうのはずだ。食道でも肝臓でも小腸でも。それが好きでないのは馴染みがないからかもしれない。もしそういうものが手や腕のように目に見えたら好きになれるのだろう。してみると、ひとでなんかは人間よりもっと愛し合っているにちがいない。ひとでは日が照ると海べに寝そべって、はらわたを出して風に当てる。だれでもそのはらわたが見られるのだ。人間はいつたいどこからはらわたを出すのかしら。お臍かしら。彼女はもう目をふさいでいた。すると青い丸がいくつもグルグル廻り出した。ちようどきのう、祭へ行って、ゴムの矢で円板を射たときのように。一本射るごとに一つずつ文字が出て、それが町の名前になる。ところがあの人わたしをうしろにからだをくつつけたがるいつもの癖で、わたしがディジ

ョン(DIYON)という町の名を完全に出すのを邪魔してしまった。わたしはうしろからさわるのが大きい、いっそ背中なんかないほうがいい。わたしは見えない人にいたずらされるのは苦が手なんだ。先方は好きだけ楽しめる。それに、こっちには向こうの手が見えない。手が上がったりおりたりするのはわかる。だが、その手がどこへ行くのかわからない。向こうは貪るように見ているのだが、こちらには向こうは見えない。あの人それは大好きなんだ。アンリーなら、そんなこと夢にも考えないんだけれど、あの人わたしをうしろへ廻ることばかり考えている。あの人わたしがお尻のあることを恥ずかしがっていると知ってるものだから、それでわざとお尻にさわるんだ、きつとそうだ。でも、あんな人のことなんか考えたくない（こわかったのだ）。わたしはリレットのことを考えたい。彼女は毎晩同じ時刻、ちようどアンリーが寝言をいい、唸り出す途端にリレットのことを考えるのだった。ところが、そこには何か抵抗があり、もう一方の姿が現われようとする。黒い縮れ毛さえチラッと見えた。そら来たと思いい、何が出て来るかわからないので、彼女はぞっとした。顔ならいい。顔ならまだいいけれど、いやな記憶が浮かび上がって、まんじりともせぬことが幾夜もあった。ある男のからだ

の一切を、とりわけ、あれを知っているのはたまらないことだ。アンリーは違う。アンリーのからだなら、頭から足の先まで想像できる。おなかがほんのり赤いほかは全身が薄黒く、ふにゃふにゃだから、いじらしくなる。幅のいい男はすわると腹に三本皺がよるもんだとアンリーはいうけれど、アンリーのおなかには皺が六本できる。あの人は一つ置きに数えてほかの皺は見ようとしなない。ただそれだけのことだ。彼女はリレットのことを考えていらいらした。「リュリュさん、あんたなんか、りっぱな男のからだってどんなものか知らないのよ」隆々とした石みたい堅いからだ、私だって知っている、もしリレットがそんなからだのことをいうなら、むろん話にならない。わたしはそんなのきらいなんだ、バターソンはそういうからだをしていた。あの人に抱きすくめられると、わたしはまるで芋虫みたいにフニャフニャになった。アンリー。わたしがアンリーと結婚したのは、からだが柔かいためだった。お坊さんみたいだからだった。彼女がはっきり顔を閉じた。するとしまいは、リレットの耳が現われた。キャンディーでこしらえたような、深紅と金のかわいい耳。だが、リュリュはその耳を見ても、いつもほど楽しくなかった。リレットの声がいっしょに聞こえて来たからである。それはリュリュのき

らいなか、高い、はつきりした声だった。「リュリュさん。あんたはどうしてもビエールといっしょに出て行くべきよ。賢明な道はそれだけね」わたしはリレットが大好きだけれど、高飛車に出てみたり、自分で自分のせりふに悦に入ったりされると、少々癪にさわる。きのうだってクーボール（カフェの名）で、リレットはもっともらしい、ちよっと怯えたような様子で顔を寄せて、「あんたはどうしてもアンリーといっしょにいる法はない。もうあの人に惚れてはいないんだもの。罪悪だわ」リレットはなにかといえばあの人の悪口をいうけれど、わたし、そりゃよくないと思う。あの人はいつもリレットにはよくしてくれたんだもの。なるほど、わたしはもうアンリーを愛してはいないかもしれない。だけどそんなこと、リレットにいつてもらう義理はないわ。リレットにかかつてはなんでも単純に、簡単に見えるんだ。惚れているかもう惚れていないか、どっちかなんだ。ところがわたしは単純じゃない。だいいち、この家にはわたしの習慣というものがあるし、それにわたしはこの人を愛している。夫なんだもの。わたしはリレットをぶってやりたかった。わたしはいつでもあの女に痛い目を見せてやりたくてしょうがない。肥ってるんだもの。「罪悪よ」といって腕を振り上げたら腋の下が見えたっけ。わたし

はあの人が腕をむき出しにしているほうが好き。腋の下がちよっと開いた。口のように。そしてリュリユは髪の毛みたいな縮れ毛のかげに、小皺のよったモーヴ色の肌を見た。ピエールはリレットのことを「丸ぼちゃのミネルヴァ」だという。リレットはそういわれるのが大きらいだ。リュリユは自分の弟のロベールのことを思い出してニコリした。ロベールはある日、リュリユがコンビネーション一枚でいたとき、「なぜ姉さんは腋の下に毛があるの」といった。「病気のさ」と答えたっけ。リュリユは弟の前で服を着替えるのが好きだった。いつもおもしろいことをいう。いったいどこからあんなことを思いつくのだろう。そして弟は、リュリユの身の廻りのものなんにでも触ってみたり、ドレスをていねいにたたんだりする。手先が器用だから、今にりっぱな裁縫師になるかもしれない。裁縫師っていい商売だ、そしたらわたしは弟のためにデザインをしてやろう。子供が裁縫師になろうと思うなんて変だわ。もしわたしが男の子だったら、探検家か役者になろうと思ったかもしれない。だが、まさか裁縫師には。ところが弟はまえから夢想家で、ろくに物もいわずひとりで考えこんでいる。わたしは尼さんになって、りっぱなお屋敷へ献金集めに廻りたかった。目がとろりとして来た。人肌みたいに柔かく。

もう眠るんだな。青ざめた美しい顔に、尼さん頭布をかぶったら上品だったろうな。何百という薄ぐらい控えの間が見られたろうな。でも女中さんがすぐ明かりをつける。すると一族の肖像画や台の上のブロンズの置き物などが見える。それから帽子掛、奥さまが小さな手帳と五十フランの小切手を持って出て来て「はい、どうぞ」「ご奇特なことでごさります。ではいずれまた」でもわたしなんかほんとの尼さんになれっこはない。バスのなかでときには男にウインクしてやる。男は、はじめはびっくりするけれど、やがてはわたしにからかいながらついて来る。そうしたらお巡りさんに頼んで豚箱へほうりこんでもらうんだ。献金は猫ばばさ。ところでなにを買いおうかしら。予防薬。何をばかな。目がとろける。これはいい。まるで目を水に漬けたよう。からだじゅうがいい気持ちだ。りっぱな緑色の法王帽。エメラルドや瑠璃の石がついている。冠はぐるぐる廻って恐ろしい牛の頭になった。だがリュリユは怖くない。スクールジュと呼んでいる。カンタル山の鳥のむれ。注目！赤色の長い川が荒野の真ん中を流れている。リュリユは家にある肉挽機とそれからゴム製品を連想した。

「罪悪よ！」彼女はハッとして、怖い目をして闇のなかに起きあがった。あいつらはわたしを苦しめている。だ

のにそれに気がつかないのか。リレットがわたしのため
を思っていることはわかつてる。けれど、ほかの
人にはあんなもののわかったリレットだもの、わたし
が思案する必要のあることくらいわかりそうなものだ。

あの男は燃えるような目で「来るんだ。おれのうちへ来
るんだ。おれはおまえをすっかり自分のものにしたん
だ」といった。あの男が射すくめるように見るときのあ
の目が、わたしには堪えられない。あの男はわたしの腕
をつかんで揉むようにした。あの目を見るといつもあの
男の胸毛を思い出す。来るんだ。おれはおまえをすっか
り自分のものにしたいんだ。どうしてそんなことがいえ
るんだらう。犬じゃあるまいし。

わたしは腰をおろすと、あの男に笑いかけた。あの男
のために白粉を替え、あの男が好きだからと思って目も
くまどっておいだのに、あの男は気がつかない。顔なん
か見ないでお乳を見てみる、この乳が胸のうえでしぼん
でしまえばいい。あの男を困らすために。でもわたしの
お乳はたいしたもんじゃない。ほんのチョッピリ小さい
のだ。ニースのおれの別荘へ来るんだ。その別荘は大理
石の階段があつて、真っ白で、海ぞいだ。一日じゅうは
だかで暮らすんだとあの男はいった。はだかで階段をの
ぼるなんておかしいわ。わたし、見られないようにあの

男に先にのぼってもらう。でないとわたし、足もあげら
れない。この人がめくらになりますように、なんて祈り
ながら身動きもしないでいることだらう。もっともいつ
もとたいして変わるわけじゃない。あの男がいると、わ
たしはいつだってはだかのような気持ちをする。わたし
の腕を取って、脅迫するように、「おまえはおれに惚れ
てるんだ!」といった。わたしは怖くなって「そうよ」
といった。おれはおまえを幸福にしたいんだ。二人して
ドライブしよう。船に乗ってイタリアへ渡ろう。おまえ
のほしいものならなんでもやろう。ところがあの男の別
荘はろくに家具調度もなく、床へマットレスを敷いて寝な
きゃならない。抱かれて寝るとあの人はいう。くさいだ
らうな。あの人の胸は日焼けして幅があるから好きにな
れそうだけれど、ずいぶん毛深い。男というものに毛が
なければいいのに。あの人の毛は黒くて昔のように柔か
い。わたしは、ときにはその毛を撫で、ときにはいやら
しくてぞっとする。できるだけ離れるのだけれど、あの
人はピッタリ抱き寄せるのだ。あの人は抱かれて眠れと
いうだらう。わたしを抱きしめるだらう。あの人のにお
いがするだらう。日が暮れたら海の音が聞こえるだろ
う。あの人の、そういう気を起こせば夜のよなかでもわた
しを起こしかねないわ。おちおち眠れないかもしれな

い。月のもののあるとき以外は。だってそのときは、さすがにそつとしいてくれるだろうから。でも、障りのある女とあれする男もあるらしい。済んだらおなかに血がつくんだ。自分の血じゃない、人の血が。シーツの上にも、そこから一面、血だらけになるにちがいない。ああいやらしい。なぜ人間にはからだがあるんだろう。

リュリュは目をあいた。カーテンは街から射す光で赤く染まり、姿見には赤いかげが射していた。リュリュはこの赤い光が好きだった。窓のそばには脇掛椅子が一つ、影絵のように浮いている。その椅子の脇のうえに、アンリーはズボンを掛けておいた。ズボン吊りが宙にぶら下がっている。ズボン吊りを買ってあげなきゃ。いや、出て行くのはいや。あの男は一日じゅうわたしを抱きしめる。わたしはあの男のものになる。あの男の慰みものになってしまふ。あの男はわたしをじっと見てこう思うだろう。「これはおれの慰みものだ。おれはこの女の、あそことあそこにさわったんだ。そして好きなときに、いつでもまたさわれるんだ」ポール・ロワイヤル村で起こったこと。リュリュは蒲団を何度も蹴った。ポール・ロワイヤルであったことを思い出すとピエールがいやだった。リュリュは生けがきのうしろにいた。あの人が自動車に残って、地図をしらべているものだとばかり

思っていたら、突然すがたが見えた。抜き足さし足でうしろへやって来てじっと見詰めている。リュリュはアンリーを蹴ってしまった。この人、目をさますかもしれない。だがアンリーは「ウーン」といったきりで目をさまさなかった。女の子のように純潔な、美しい青年を知ってみたい。連れだって海岸を散歩しよう。手と手を取りあおう。そして夜になったら対のベッドに寝て、兄と妹のようにしていよう。そして晚じゅう語り明かそう。それともリレットと暮らすのもいいわ。女同士がいいものね。あの人はよく肥えた、すべすべした肩をしている。あの人がフレネルに惚れていたころは、わたしほんとに情なかった。でもフレネルがいまあの人を愛撫しているんだ、肩や脇腹をすかになでているんだ、あの人が溜め息ついているんだと思うと興奮したつけ。わたしは金輪際リレットにさわればししない。たとえ構わないといったって、たとえ「構わないわ」といわれたって、あの人をどうしていいかわたしにはわからない。そんなことわたしにはできないけれど、もしわたしの姿が人の目に見えないのだったら、リレットがされているあいだ、そこにいてあの人の顔を見てやろう（そうなってもまだあの人がミネルヴァみたいだったら呆れるわ）、そしてあの人の開いた両膝を、バラ色の膝をそつとなでて、あの人が

うめくのを聞いてやろう。リュリユは喉をカラカラにして短く笑った。人間って、ときどきそんなことを考えるものだ！ あるときリュリユはピエールがリレットを強姦したがつているんだとでたらめをいった。そしてピエールに手をかして、リレットを両手でおさえたつけ。きのう、リレットは頬を真っ赤にしていた。わたしと二人、寄りそって長椅子に腰かけていた。リレットは膝をすぼめていた。でも二人はなんにもいわなかった。これから先だってなんにもいわないだろう。アンリーは軒をかき出した。リュリユは軽蔑したように口笛をならした。わたしはここにいて、寝つかれないで、くよくよ物を思っている。それにこの人のばかッたら軒なんかかいている。もしわたしを抱きしめて哀願したら、もし「おまえはおれにとつてはすべてなんだ、リュリユ、おれはおまえを愛している、行っちゃいけない！」といいさえしたら、犠牲になってここにいてのに。そうだ、わたしは一生この人とここにいて。この人を喜ばせるために。

二

リレットはカフェ・ド・ムムのテラスに腰かけてポルトを注文した。ぐったり疲れ、リュリユのことが癪にさわった。

「……それに、このポルトはコルクくさい。リュリユはいつもコーヒを飲むんだから平気だけれど、でもアペリチフの時刻にまさかコーヒを飲むわけにはいきやしない。ここじゃ、みんな文なしだから、一日じゅうコーヒーか、でなきゃクリーム・コーヒを飲んでいて。ずいぶん興奮するだろうな。わたしなんかそんな真似できやしない。いらいらして店じゅうのものを女客たちの鼻ッ先にぶっつけたくなるだろう。じっとここにいる用のない連中なんだもの。なぜあの人がいつでもモンパルナスで会おうというのか、わたしにはそのわけがわからない、カフェ・ド・ラ・ペーカパンパンで会ったって、けっきょく、あの人のうちからは同じ道のりだし、わたしのほうは仕事場から近くになるのに。いつもこんな連中の顔を見るんじや、どんなにうんざりするかしれやしない。ちょっとでもわたしに暇があったらここへ来い。テラスの席ならまだしもだけれど、中はよごれた肌着のにおいがする。へボ芸術家なんかわたしはきらい。それにテラスの席だって、わたしは小奇麗にしているんだもの、場違いの感じだわ。髯もあたらなないこの男たち、なんだかえたいの知れない女たちのなかにわたしがいるのを見たら、道を通る人はびっくりするにきまっている。「あの女はあそこで何してるんだろう」と思うに

ちがいない。夏場は、相当かねのあるアメリカの女がときどきやって来ることは知ってるけれど、今の政府が政府だから、みんなイギリスでとまってる。さ、贅沢品の商売があつたりなのは。去年の今時分とくらべると、わたしなんか売上げ半減さ。いったいほかの人はどうしてるんだらう。だってわたしが最優秀の売り子なんだから。デューベックおばさんがわたしにそういったわ。あのヨネルって娘、かわいそうなんだ。まるで売れないから今月は基本給に一文の割増しもつかなくなつたにちがいない。しかも一日じゅう立ちづめなんだから、気持ちのいいところですか。こしはのんびりしたくなるわ。ちょっと豪奢で、芸術的で、ボーイもきちんとしてるところ、目をふさいで気分のままに身をまかしたくなるような。それから静かな音楽もいるわ。ときたまアンバサドワールのホールへ行くくらい、そう高くはつかないだらう。それにしても、ここのボーイはほんとに威張りがあってる。なるほど、けちなお客を相手にしていることがよくわかるわ。わたしの係りのあの小がらな髪の毛の黒いのだけはべつで、あれはいい。どうもリュリユは、ここのこんな連中に取り巻かれてるのがいいと見える。ちつとでもしゃれた場所へ行くのが怖いらしい。結局のところ自信がないんだ。男の人が上品にふるまう

と、もう気おくれがするのね。あの人はルイがきらいだった。ところがここだと気が楽なんだ。貧相で安物のパイプを使って、カラーさえしていないのがいる。それから女を見るあの目付き、あの連中はべつに隠そうともしない。女を買う金のないことがよくわかる。ところがこの界限は女だけは事欠かない。胸糞がわるいほどたくさんいるのだ。このへんの男はまるで女を取って食いそうに思われる。そして、あなたを自分のものにしたいのだということをする。こしはおつにいい廻し、感じのいいように事をはぶくことさえできないのだ。

ボーイが近づいて、

「からくちでございませう、ポルトは、お嬢さま」

「ええ、ありがとうございます」

するとまた愛想よく、

「いいお天気でございますね」

「でも早すぎはしないわね」とリレットはいった。

「なるほど、果てがないほど長い冬でございました」

彼が去つたあとをリレットは見送った。「あのボーイ

大好きだ」と彼女は思った。

「ちつとも出しゃばらない。馴れなれしくはないが、それでもきつとわたしになにかお愛想をいう。特別に気をくばってくれる」

瘦せた猫背の青年がしつこく彼女を見つめていた。リレットは肩をそびやかしてその男に背を向けた。「女にウインクしようと思つたら、せめて綺麗なシャツぐらい着ているもんだ。もしも話しかけて来たらそう返答してやろう。なぜあのひと家出しないんだろう。アンリーを苦しめたくないっていうけれど、そりゃあんまり奇麗すぎる。なんといったって女が不能の男のために一生を棒にふる法はない」リレットは不能者が大きらいだ。肉体的に好けないのだ。「あのひとは家出すべきだ」とリレットは断定した。「一生の幸福にかかわることなんだ。自分の幸福を弄んではいけないってあのひとにいつてやろう。リュリュあんたは自分の幸福を弄ぶ権利はないのよ。いや、あのひとにはなにもいうまい。もうおしまいだ。これまで百べんもそういったんだもの。いやがる人を無理に幸福にはできない」リレットは疲れきっていたので頭のなかに大きなうつろを感じ、キャラメルが溶けたようにコップのなかにねばねばしているポルトをじっと見つめた。すると心のなかで声が「幸福、幸福」と繰り返す。ほんとにしんみりさせる、どっしりしたい言葉だ。もし『夕刊パリ』の懸賞で意見をきかれたら、これがフランス語で一番うつくしい言葉だと答えたろうと、そう思った。「そんなこと考えた人あるだろうか。

みんなは気魄キハクとか勇氣クイラーヂュだとか答えたけれど、それはその人たちが男だからだ。女でなきゃ。女でなきゃ思いつかない。賞が二つあるのが本当だ。一つは男子賞で、一番うつくしい言葉は名誉オヌールというところ。もう一つは女子賞でわたしが当選、幸福オヌールと答えて。オヌール、ポヌール、語呂が合っているのはおもしろい。わたし、あのひとにいつてやろう。リュリュ、あんたは自分の幸福を台なしにする権利はないのよ。あんたのポヌール、ねえリュリュ、あんたのポヌール。わたし自身としては、ピエールはとてもしつぱだと思う。だいいち、男らしい男だし、それに頭がいい。これはけつして損じゃない。お金があるならあのひとにもいろいろ親切にするだろう。あのひとは日常生活のこまごました煩いを征服できるたちの人だ。これは女にしてみれば悪くない。命令できるってのはほんとにいいなあ。ちよつとしたコツなんだけど、あのひとはボーイやボーイ長に物いうすべを知っている。みんなあのひとのいうことをきく。押しが利くってこのことだわ。どうもそれがアンリーには一番欠けているらしい。そのうえ健康の点も考えなくちゃ。あのひとのおとうさんがおとうさんだから気をつけたほうがいい。ほつそりして透きとおるように白くって、食欲もなく睡眠不足で、一日四時間眠るきりで、切れ地の図案を

売り込みに一日じゅうパリを駆けまわるなんて、ほんとに考えなしのすることよ。正しい養生を守って、一度にすこしかたべないのもいいけれど、それならそれで、何度でも、きまった時間にたべなきゃならない。向こう十年間サナトリウムへ入れられたってもう手遅れだ」

彼女は当惑したように、モンパルナス十字路の大時計を見た。針は十一時二十分を指している。「わたしはリユリユってひとがわからない。おかしいな。いったい男好きなのか男ざらいなのか、てんで見当がつかない。でもビエールといっしょになったら、あのひと満足するにきまっている。去年の男のラビニューさん、わたしはリビニュー（人間の屑）と呼んでいたが、あの人といっしょにいるよりは、ちっとは気持ちが変わるはずだ」それを思い出してリレットは愉快になったが、例の痩せた青年が相変わらず見つめているので微笑をおさえた。彼女は振り向いた途端に男の視線をとらえたのだった。ラビニューは顔にいっぱい、黒いブツブツが出来ていた。リユリユはおもしろ半分、爪で皮をおさえては、このブツブツを取ってやった。「気持ちが変わるけれど、これはあの人の罪じゃない。リユリユは美男子ってどんなものか知らないんだ。わたしはハイカラな男が好き、だいいち、いいもんだわ、男のすばらしい身の廻り。ワイシャ

ツに靴にキラキラした美しいネクタイ。荒っぽいかもしれないがじつに柔かい。力強い。柔かい強さ。男のすうイギリス煙草の匂い、オー・ド・コロニーの香水のにおり、それから、きれいに剃ってあるときの男の肌は、あれは……あれは女の肌とはちがう、まるでコルドヴァの革みたいだ。男のがっちりした両腕がからだに巻きつく。男の胸に頭をもたせかけ、めかした男の甘い匂いがかぐ。男は甘いことばをささやきかける。男たちはすばらしいものを身につけている。牝牛の革のみごとな堅い靴。「大事な、やさしいおまえ」と男はささやく。すると気が遠くなる。リレットは去年自分を捨てて行ったルイのことを思い出し、胸がせまった。「身なりを構う人、大型の指輪だの金のシガレット・ケースだの珍しい飾りだの、いろいろお洒落のすきな人。ただそういう人がとくどきなんと助平なことするんだろう。女よりひどいわ。一番いいのは四十男かもしれない。びんの白くなつた髪をバックにして、まだ身だしなみは忘れない人、肩幅があって引きしまって、とても運動家タイプだけれど世故にたけていて、苦労しているから思いやりがある、といった人。リユリユは、からきしねえだから、わたしのような友達のあるのは儲けものなんだ。だって、ビエールもそろそろ業を煮やして来たんだもの。それに